

## 現代ラテンアメリカにおけるカトリシズムの諸相（2）

水 戸 博 之

キーワード：解放の神学・カトリシズム・黒人・社会正義・人種問題・第2ヴァティカン公会議・ブラジル・マイノリティ・ミラ神父・ラテンアメリカ

### 0.

本報告は、前回に引き続き、科学研究費補助金基盤研究（B）「20世紀における多様なマイノリティ状況の解明と共生言説の検討（研究代表者・田所光男）」において、ラテンアメリカの宗教を担当する筆者が2010年3月にブラジルとアルゼンチンで行った調査旅行の成果の一部である。<sup>1</sup>本稿では、研究協力者として本プロジェクトへの参加が期待されながら急逝したイエズス会士ジョアンオ・マノエル・リマ・ミラ神父（João Manoel Lima Mira S J 1948-2010）の遺品の一部から、神父が1980年代半ばブラジル南部サンタ・カタリナ州で活躍した当時、収集した新聞等切抜き資料に焦点を当て考察を行う。<sup>2</sup>

本稿を進めるに当たって一言及しておかなければならないことがある。すなわち、ミラ神父の人種的属性が黒人であったということである。この点について、神父自身、祖先と *raça negra*（黒人種）さらに黒人文化について確固とした誇りを持っていた。<sup>3</sup> それゆえ、ここでは *negro* の訳語として「黒人」を使用する。<sup>4</sup> また、ミラ神父の祖先は、自由意思によりブラジルに渡った家系であり、その一人マヌエル・コンセイサオン・ダ・シウヴァ・サントス（Manuel Conceição da Silva Santos）は、Club Abolicionista（奴隷制廃止協会）を1881年3月25日にリオ・グランデ・ド・スル州ペロタスで創設した。神父自身、後述のように、人種問題の論客として活躍した。<sup>5</sup>

さらにもう一点、彼は、以下に述べる資料の多くにおけるように、教会を西欧文化とともに厳しく批判しているが、カトリック司祭としてのキリスト教のとらえ方はいかなるものであったか。この質問は頻繁に受けたそうである（資料20）。立場は極めて明解であり、所属するイエズス会そしてキリスト教の教義と矛盾するところは何もない。「顕著な疎外の原因であり結果である征服者を通じてもたらされた歴史上のキリスト教とイエス・キリスト自身の教えは区別されなければならない。あるラテンアメリカの状況の考察から、私は次の意識を持つようになって行った。私は、心の中で、三つのことを全てそれぞれ明確に自覚すべきである。イエスのもとの教えは解放する教えである。もし私たちにそのことが理解できるならば、そのとき、教えは解放者となり、私たちが

民族性として所有する文化を否定することはない。すなわち、最初の教えは全く歪曲されてしまったということである。」<sup>6</sup>

## 1. ミラ神父略歴

近現代のカトリック修道会の中で、とりわけ個性的な人物を輩出したイエズス会においても、ミラ神父は極めて異色な存在であったと思われることから、まず経歴を略述する。<sup>7</sup>

1948年9月19日 リオ・グランデ・ド・スル州（以下RS）ペロタス（Pelotas）に生れる。

1968年2月1日 パレシ・ノヴォ（RS）でイエズス会入会。

1970年-71年 サンパウロ・アンシエタ校で哲学を学ぶ。

1972年-73年 サンタ・カタリナ州フロリアノポリス市コレジオ・カタリネンセ教員。

1974年-76年 サン・レオポルド（RS）コレジオ・クリスト・レイで神学を学ぶ。

1976年12月18日 イエズス会司祭叙階。

1977年-79年 リオデジャネイロ・カトリック大学で神学修士の課程を修める。

1980年-83年6月 マト・グロソ州クイアバで司牧活動。

1983年後半 チリで第三修練を行う。

1983年 サンパウロ Edições Loyola から『ブラジル・コロニアル期における黒人の宣教 Evangelização do Negro no Período Colonial Brasileiro』を出版。

1984年-88年8月 フロリアノポリス市コレジオ・カタリネンセに戻り、宗教学の教授と霊性指導を行う。

1988年 日本文化と仏教を中心とした東洋宗教を研究するために来日。1988年の来日当時、第三修練（Terceira Provação）を修了した黒人神父はブラジル全土で彼を含め3名のみであったという。

1992年-2006年 上智大学教員。

2006年6月に脳出血で倒れる。年末、療養のためブラジル帰国。その後、ブラジリア、サン・レオポルド等でリハビリに努める。

2008年末サンパウロで茶道教授を中心に活動再開。

2009年8月-9月、イタリア半島のサンマリノ共和国に渡航し太極拳や茶道の指導を行うまで回復し、その後の経過も極めて良好で本格的な司牧活動への復帰も期待されていたが、12月下旬に、脳出血再発。

2010年1月11日 サンパウロ市イピランガ病院で集中治療を受けたが、午前5:30（現地時間）死亡。享年61歳。

## 2. 資料の刊行された 1980 年代のブラジル

ミラ神父の資料は 80 年代の特に中ごろのものが多い。資料の詳細を検討する前に、この時期のラテンアメリカのカトリシズムとブラジル社会がいかなる状況にあったか、今一度確認してみよう。

この時期のラテンアメリカ、特にブラジルに関しては、次のことが想起される。

1) レオナルド・ボフ (Leonardo Boff 1938-) に代表される解放の神学者と教皇庁との間の緊迫した関係が顕在化。<sup>8</sup>

2) 軍事政権が 1985 年に解体。<sup>9</sup>

さらに、本稿の資料との関係で、次の事柄が加えられるべきであろう。

3) 「黄金法 A Lei Áurea」制定 100 周年 (1988 年)。人種民主主義 (A Democracia Racial) の理想と現実の乖離に対し、黒人の側からの様々な発言や運動が行われ、資料が示すように、ミラ神父も活発に活動する。

ここであえて上記の 3 点を取り上げたのは、1979 年から 1987 年という期間に発表された資料との関係で、ラテンアメリカにおける 70 年代末から 80 年代という時代がいかなるコンテクストであったか、その特徴を筆者なりに把握しておきたかったからである。いずれも大きなテーマであることは明白である。他方、筆者が今回の調査旅行であらためて認識したことは、地域的には同じラテンアメリカであっても、ブラジルとアルゼンチンとは、当然のことながらかなり事情が異なるということである。アルゼンチンに関しては、前回、予備的調査として、貧困問題に取り組み 1974 年暗殺された Carlos Mugica 神父についてとりあげ、今回の調査で、当時の関係者との接触も果たすことができた。1ヶ月程度の短期間のうちに二カ国を回り、帰国後本稿の資料である新聞記事を通読して思うことは、やはり、第 3 項として取り上げた人種問題の社会における存在感が両国で大きく異なることである。後述のように、ブラジルにおいては、軍政期の軍部でさえも一定の配慮を行っていた。

### 2. 1 ラテンアメリカにおけるカトリシズム

第 1 の「解放の神学」とヴァティカンとの関係は、ボフが 1984 年にヴァティカンに召喚され、1992 年に司祭職を離れたことに象徴される。当時、前教皇ヨハネ・パウロ 2 世 (教皇 1978-2005) の時代であり、ラツィンガー枢機脚 (現教皇ベネディクト 16 世) が教皇庁教理省長官 (1981 就任) であった。一般に両者とも思想は保守的であり、解放の神学を圧迫したと評価されているが、前教皇に関しては、南米の状況に一定の理解を示したとも言われる。80 年代を回顧して、カトリック教会にとって非常に不幸であったと思われることは、ちょうどその時期に米国が反共主義的なロナルド・レーガン (在職 1981-1989) 政権の時代であり、米国のラテンアメリカ政策の中で、カトリックの新たな潮流が

マルクス思想との関係即反米的なものを見なされてしまったことである。<sup>10</sup> マッカシズムが去って四半世紀経過した米国ではあったが、当時、言論界の有力者で、メディアや公共の場で「マルクス」や「社会主義」といった言辞を冷静に扱うことができた人物は皆無だったのであろうか。<sup>11</sup>

80年代以来、ラテンアメリカのカトリック教会は、強権的軍政との関係のみならず、内部的に新潮流と保守派の抗争により、かなりの人的損失と消耗を余儀なくされたといわざるを得ない。現在、若い世代の一部に、過去の教皇庁との関係のためか、「解放の神学」への言及がためらわれる雰囲気も存在するようである。筆者の今回のブラジルとアルゼンチンで接触した聖職者から受けた印象では、少なくとも「解放の神学」を取り上げることに何ら問題は感じられなかった。ちなみに、現在の潮流について触れておこう。以下、サンパウロのイエズス会士たちから教示を受けたことがらである。2007年にサンパウロ州アパレシダ (Aparecida) で開催された、第5回ラテンアメリカ・カリブ司教総会議 (V Conferência Geral do Episcopado Latino-Americano e do Caribe) の文書は、現在の中南米のカトリシズムを理解する上で欠かせないものである。アパレシダは、現教皇ベネディクト 16 世の許で開催された会議であったが、中南米の現状に立脚し、第2ヴァティカン公会議 (1962-1965)、そして過去4回の司教総会議の中でも、特に「メデジン会議」と通称される第2回ラテンアメリカ司教総会議 (II Conferencia General del Episcopado Latinoamericano, Colombia, Medellín 1968) の精神を21世紀に具現化することを目指している。本稿では検討できないが、筆者の渡航中、第2ヴァティカン公会議の再評価に関する文献とともにアパレシダ会議に関する著作の出版数が、カトリック系書店で眼を引いた。

### 3. カルラ・クリスティーナ・コガ (Carla Cristina Koga) 氏所蔵ミラ神父資料

#### 3. 1 資料の状態と撮影

資料は切り抜き(一部記事のコピー)の状態でファイルケースに保存されていた。撮影は、筆者が滞在していたサンパウロ市リバルダーヂ地区のいわゆる東洋人街にあるニッケイパレスホテル (Rua Galvão Bueno, 425 - Liberdade) 一階ロビーで、2010年3月3日に、所蔵者のコガ氏とともにデジタルカメラ (Lumix DMC-FX60) を使用して行った。事前に資料の整理をする時間がなかったため、撮影は順不同である (f. 番号は画像番号)。

#### 3. 2 資料の内容と分析

内容に関してまず留意せねばならないことは、約四半世紀前の資料であり、当然のこ

とながら、現在のブラジル社会とはかなり異なる状況下で執筆されたということである。現状も貧困や大きな社会格差など多くの問題を抱えながらも、当時と比較すれば、改善に向かっていることを否定する人はいないであろう。

重複するものを除くと資料は33点になる。必ずしも多い点数とは言えないが、長文の記事もあり、かなりの情報量といえる。記事はミラ神父自身へのインタビューあるいは談話が多くを占め、内容は、人種問題を中心に、性道徳、解放の神学、聖職者の妻帯、武道、東洋文化、フリーメーソン等と多岐にわたる。(本文末のリストを参照)

記事の発表年と点数は次のとおりである。

1979年2点；83年1点；84年14点；85年3点；86年12点；87年1点；不詳1点。

すべて1988年の来日以前の記事であるが、刊行年の分布を見て注目すべきことは、末期とはいえ軍政期(1964-1985)の記事が約半数占めることである。ガイゼル政権(1974-1979)以来、報道機関に対する検閲の緩和と民主化への流れは進んではいたものの、後に見るように、記事の多くは社会的因習を告発するものであり、権威主義的秩序を維持しようとする軍政とはおよそ相容れない内容である。軍政期最後のフィグレド政権(1979-1985)の言論統制およびカトリック教会との関係がいかなるものであったか、その一端を垣間見ることができるが、イエズス会士であればこそ可能な言動であったであろうか。

### 3. 3 軍政末期および民政移行期の言論統制と人種問題

「人種民主主義」あるいは「人種デモクラシー」(A Democracia Racial)：ブラジルには人種差別は存在しない。2010年の今日においては、名実ともに達成されているべきである。かつてのヴァルガス政権(Getúlio Vargas 1930-1945)において国是であり、シュテファン・ツヴァイク(Stefan Zweig 1881-1942)の著書*Brasilien*, 1941により世界に喧伝された理想のブラジル社会である。<sup>12</sup> 残念ながら1980年代においては「神話」であった。

本稿の資料との関連で、ここでは二つの事例を取り上げる。一つは奴隷制廃止令記念事業、もう一つは軍部の対応である。

皮肉なことに奴隷制を廃止した「黄金法 A Lei Áurea (1881年5月13日制定)」百周年記念事業自体が差別であると糾弾をうける(1984年：資料9・10・13・14)。<sup>13</sup> 問題は、ペドロ・ガスタオン・ジ・オルレアンス・イ・ブラガンサ公(Pedro Gastão de Orleans e Bragança 奴隷制を廃止した当時のブラジル王室の子孫。現スペイン国王ファン・カルロスI世は甥にあたる)を会長に冠する5冊の研究書を編集する委員会の構成10名が全員白人であり、黒人の委員が1人もいないということであった。その理由は、歴史学博士号を取得者、あるいは「少なくとも」ブラジル奴隷の専門的研究者が黒人にいないと

いうことであった。実際には、黒人の博士や専門家は存在したし、その中にミラ神父も入っていた。彼が斥けられたのは、前年1983年に発表した著書『ブラジル・コロニアル期における黒人の宣教』が内容的に過激であることが問題視されたことが原因のようである。いずれにしても、当時、この件に限らず、一般に社会の支配層から、黒人には学術的研究能力のある人材がいないと考えられていたことが問題である。

他方、軍の検閲および人種問題への姿勢は、社会の否定的な側面の報道を単に抑圧するものではなく、一定の配慮を行っていたことが資料から伺える点で興味深いものがある。無論、残念ながら人種問題に関する否定的な内容の記事が圧倒的に多い。<sup>14</sup> 軍政期の言論統制と人種問題の関係を示す例として、1979年の資料、週刊風刺新聞「パスキン」<sup>15</sup>に掲載された黒人運動の統一を試みた長い紛糾した討論会の記事がある（資料1）。そこに関連した挿話として、映画「黒いオルフェ Orfeu no Carnaval」（風刺新聞らしく、監督をカミュといってもアルベール（ノーベル賞受賞作家）ではなく「ペテン師 picareta」の方とわざわざ断っている）を見て、人種差別のない楽園と夢想しブラジルを訪問し、屈辱的な処遇を受けたアフリカ系アメリカ人女性（サブタイトル原文は *mulata*）人類学者 Angela Gillian がパスキン紙に語った経験談と発表するに至る検閲の経緯が30数行の記事が掲載されている。人類学者は、サントス港に船が到着するやいなや、警察により売春婦として扱われた。罪状は、彼女が黒人であるということであった。彼女は、落胆し、ブラジルの隠れた人種主義が自国アメリカ合衆国のあからさまなものより深刻であることを見出した。注目すべきは、この対外的に極めて不都合な事件が、軍の担当将校の同意を得て、しかるべき検閲手続きを経てインタビュー原文のまま無修正で、ただし本人が出国した後に、発表されたということである。さらに、友人の研究者 Joan Dassin がパスキンに対する検閲の研究を行っているという記述も見られる。<sup>16</sup>

もう一件、部下がクルビ（clube 娯楽施設）への入場を拒否された件に対し、施設の閉鎖を命じた司令官の事例が間接的ではあるが掲載された記事がある（資料25）。記事自体は1986年であるが、サンタ・カタリナ州で起きた同種の事件（資料23・24・26）に関連した1975年当時の回想談である。インタビューに応じたのは、郵便配達人 Ariel Farias で、19人の同僚と共にクルビに入場しようとして、自分だけが拒否されたことを告発したものであった。結果は、たらいまわしにされた挙句、ようやく裁判になり、報道機関からも注目されるが、2年半の後に下された判決は、実質無内容なものであった。

軍人の人種問題に対する姿勢は、たらいまわしの段階で語られる。法的手段に訴えようとした被害者には、相談した最初の弁護士から金銭の浪費であるという回答があり、数人の弁護士の態度も同じものであった。郵便配達人は、第五艦隊の司令官が同様な入場拒否の態度をとったいくつかの施設を閉鎖させたことを知り相談するが、人種的偏見

の被害が自分の部下におよんだ時に限ったことであって、他は何もできないと言われる。司令官は、むしろ郵便配達人の労働組合に相談したらどうかと助言。労働組合の弁護士は、労働問題を担当とするのみとの回答。さまざまな経緯の後、一人の弁護士と契約し、法的手続きを始める。<sup>17</sup>

このような記事を見ると、様々な悲劇の原因となった軍事政権が望ましいものでないことは言うまでも無いことであるが、体制が20年以上継続し最も弾圧の厳しかったメジシ政権期 (Emílio Garrastazú Médici 大統領:1969-1974) に「ブラジルの奇跡 (milagre)」とよばれる経済発展を遂げた基盤に何があったか、政治経済とはまた異なる次元に筆者の関心は向かわざるを得ない。他方、軍政下の他のラテンアメリカ諸国同様、軍自体が一枚岩でなかった点では、ブラジルも例外ではない。ガイゼル政権から民主化への過程において、軍部内部でも、政権を担当し強圧的な政策は早晚行き詰るという現実的思考をもち「政治解放 abertura política」を段階的に進めていた政府穏健派と強硬派 (a linha dura) との抗争があったことは複数の史家が指摘している。<sup>18</sup>

事件に対する当時のミラ神父のコメント：「アロンソ・アリノス (差別禁止) 法<sup>19</sup>が実際には全く機能していない (資料24)。「わが国の差別はアフリカにおけるものより暴力的である。なぜなら、我々はいつ攻撃されるかここでは分からないからである (資料24)。」

以上、1980年代のブラジル社会の一側面を反映した資料をわずかではあるが紹介した。

資料：ジョアンオ・マノエル・リマ・ミラ神父関係記事リスト (年代順)

(Padre João Manoel Lima Mira SJ Lista de artigos em ordem cronológica)

なお、いくつかの記事では、あだ名の Joca または Padre Joca が用いられている。タイトルの後のアステリクス\*は、神父が直接は関与していない記事。資料番号は年代順の通し番号。

1979年 2点

資料1

“Uma tentativa de unificar o movimento negro: Eles, que são pretos, que se entendam”

「黒人運動を統一する試み：彼ら、黒人である者たちは、互いに理解しあうべし」

(0-8: números posteriormente acrescentados)

Jornal: O Pasquim (Um jornal que não nega a raça (negra)) 「(黒) 人種を否定しない新聞 (ミラ神父の書き込み)」; Cidade: Rio de Janeiro

Data: 20/09/79: ano XI-Nº 533 – Rio, de 14; (f. 91-106)

資料2

“Agora ninguém segura a negrada”

「いまや何人も黒人の勢いを妨げることはできない」

Jornal: O Pasquim ; Cidade: Rio de Janeiro

Data: 27/09/79: ano XI-Nº 534 – Rio, de 21; (f. 109)

1983年 1点

資料3

“Hará demonstraciones: Sacerdote – karateca mañana en Valdivia”

「デモンストレーションを挙行：司祭—唐手家 明日バルディビアにて」(スペイン語)

Jornal: el Diáριο; Austral Cidade: Valdivia (Argentina)

Data: 02/12/83 (viernes) : Ano LXVIII Nº 24,460 Edición Nº 368; (f. 112-113)

1984年 14点

資料4

“A lei não protege mais a virgindade” (3 fólhos) (por Patricia Grillo; entrevista)

「法律はもはや純潔を(婚姻成立の)要件としない」(パトリシア・グリロによるインタビュー)

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 27/05/84; (f. 70-75)

資料5

“Leitura Denúncia “A chamada Abolição da Escravatura foi uma mentira”” (entrevista 3 folhos)

「読み物 告発『いわゆる奴隷解放は虚構であった』」(インタビュー)

Jornal: Jornal de Brasília; Cidade: Brasília

Data: 27/07/84 (sexta-feira, 10); (f. 53-55)

資料6

“Jesuíta lança livro polémico sobre negro” (Na foto Celi Leal e o padre Joca)

「イエズス会 土黒人に関する争点の書を刊行」

Jornal: O Povo; Cidade: ?

Data: 16/08/84; (f. 61)

資料7

“Padre Joca A Igreja é racista”

「ジョカ神父 教会は人種主義である」

Repórter: Salete Lisboa; Foto de Lúcio Bernardo

Jornal: Última Hora; Cidade: São Paulo ?

Data: 18/08/84; UH Revista; (f. 53-54) 黒人神父は 50 人に達しない。

資料 8

“Padre negro vê discriminação até dentro da Igreja”

「黒人神父教会 (の歴史) にも差別を見る」(著書の紹介)

Jornal: O Globo; Cidade: Rio de Janeiro

Data: 01/09/84; (f. 108)

資料 9

“Racismo Como Diógenes Comissão da Lei Áurea procura um negro”

「人種差別 (犬儒派の) ジオゲネスのように 黄金法 (奴隷制廃止百周年記念) 委員会、黒人委員の人選 (難航)」

Jornal: Veja; Cidade: São Paulo

Data: 05/09/84; (f. 52)

資料 10

“13 de Maio vale pouco aos negros conscientes”

「5 月 13 日 (奴隷制廃止『黄金法』制定日) は意識ある黒人には意味が乏しい」  
(氏名が Lira と誤記)

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 16/09/84; p.29; (f. 90, f.111: o mesmo que f.90)

資料 11

“Pe. Mira lança livro sobre o negro”

「ミラ神父黒人に関する著書を刊行」

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 03/10/84 (Variedades-23); (f. 51)

資料 12

“Lançamento Livro” (A Evangelização do Negro no Período Colonial Brasileiro)

「新刊」(ブラジル・コロニアル期における黒人の宣教)

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 09/10/84; (22); (f. 52)

資料 13

“Como a igreja tratou os negros”

「いかに教会は黒人を扱ったか」

Jornal: Lutas; Cidade: Florianópolis

Data: 10/10/84; Ano I, número 2; 8/LUTAS; (f. 56)

資料 14

“Comunidade negra cita historiadores da raça”

「黒人コミュニティーは（黒）人種の歴史家を列挙」

Jornal: Estado de Minas; Cidade: Minas Gerais

Data: 17/10/84: p. 8; (f. 117-119)

資料 15

“Padre Joca lança seu livro dia quarto, aqui”

「ジョカ神父自著を4日、当地（ペロタス）でプレゼンテーション」

Jornal: Diário Popular; Cidade: Pelotas-RS

Data: 27/10/84 (sábado); (f. 63)

資料 16

“Padre jesuíta lança livro em promoção da Fundapel”

「イエズス会神父 Fundapel（ペロタス文化・スポーツ・娯楽・観光事業団）の広報活動で自著を紹介」

Jornal: Diário Popular; Cidade: Pelotas-RS

Data: 06/11/84 (terça-feira): ano 95 N.º 58; (f.63, f.85)

資料 17

“Tudo pronto para a 12ª feira do livro de Pelotas”

「第12回ペロタス書籍見本市準備完了」

(A Evangelização do Negro no Período Colonial Brasileiro)

Jornal: Diário da Manhã; Cidade: Pelotas-RS

Data: 27/11/84 (terça-feira) : ano VI No 130 (f. 61-62)

1985年 3点

資料 18

“Sexualidade feminina: o que pensam os homens e a Igreja” (entrevista)

「女性の性生活：男性と教会の見解（インタビュー）」

Autora: Patrícia Grillo

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 21/04/85: p.35; (f. 112-114)

資料 19

“Padre Mira, personagem do Domingão”

「ミラ神父、日曜特集の人」

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 29/12/85: Ano 71 N.º21.491; (f. 123)

資料 20

“Padre Mira, um Jesuíta que respeita a cultura oriental e a Teologia da Libertação” (entrevista)

「ミラ神父 東洋文化と解放の神学のイエズス会士 (インタビュー)」

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 29/12/85: Ano 71 N.º21.491: Domingo Página 6; (f. 125-128)

1986 年 12 点

資料 21

“MIRA: um sopro de Verbo novo” (foto)

「ミラ：新しい『み言葉』の息吹」(写真のみ)

Jornal: Jornal de Brasília: Cidade: Brasília

Data: 02/02/86: Domingo: (f. 114)

資料 22

“O corpo (II)” Padre Mira S.J. Presidente da Associação Cultural Brasil-China

「肉体論 (Ⅱ)」イエズス会ミラ神父 ブラジル・中国文化協会会長

Jornal: Diário Catarinense; Cidade: Santa Catarina

Data: 26/06/86; (f. 110)

資料 23

“Negros querem fechar o clube que pratica racismo no sul do Estado (Tubarão)” \*

「黒人は州南部において人種差別を行うクラブの閉鎖を望む (トゥバラオ)」

Secretaria da Justiça Giberto Nanhas Assessoria de imprensa Arnaldo S. Costa

Jornal: Jornal de Santa Catarina; Cidade: Blumenau

Data: 12/07/86 (Sábado) (f. 46)

資料 24

“Padre condena atitude de clube sulino”

「(ミラ) 神父、ブラジル南部のクルビの姿勢を断罪」

“Discriminação existe em SC, diz Unitivo”

「差別がサンタカタリナ州に存在する。Unitivo (サンタカタリナ黒人協会) の見解」

Jornal: ? ; Cidade: Santa Catarina?

Data: 1986 julho ?; (f. 51)

資料 25

“Racismo: carteiro recorda o caso que envolveu até Poder Judiciário” \*

「人種差別：郵便配達人は司法をも巻き込んだ事例を回想」

Secretaria da Justiça Giberto Nanhas

Assessoria de imprensa Arnaldo S. Costa

Jornal: Jornal de Santa Catarina (Secretaria da Justiça: Giberto Nanhas; Assessoria de imprensa: Arnaldo S. Costa?); Cidade: Blumenau

Data: 13 e 14/07/86 (Domingo e segunda-feira): (f. 50)

資料 26

“Giba Preconceito Racial” (Coluna por Giberto Nanhas)

「Giba 人種的偏見」(ジルベルト・ナニヤスのコラム)

Jornal: A Gazeta (Secretaria da Justiça: Giberto Nanhas; Assessoria de imprensa: Arnaldo S. Costa?); Cidade: Florianópolis

Data: 15/7/86: (f. 45)

資料 27

“Ora Iê Iê Oxum, Adeus Mãe Menininha do Gantois”

「追悼マンイ・メニニャ・ド・ガントイス (アフロ・ブラジル宗教女司祭長)」<sup>20</sup>

“Continuam as homenagens” (Comentário do Pe. Mira)

「各界から弔意続く」(ミラ神父のコメント)

“Também aqui, orações por Mãe Menininha”

「ここ (フロリアノポリス) でもマンイ・メニニャ追悼の祈り」

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 15/08/86 (sexta-feira) : 2º Caderno (p.17); (f. 79)

資料 28

“Clube do Samba Corações de amores e pecados, o enredo da F. do Continente” (Autor: Aldírio Simões) \*

「サンバ・クルビ 愛と罪の心 (アダムとイヴをモチーフ)、クルビ『大陸の子ら』の脚本」(アウジリウ・シモインス筆)

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 15/08/86 (sexta-feira) : 2º Caderno (p.18: verso da página anterior); (f. 83)

資料 29

“Entrevista (por Maria Helena de Morães)” (3 folios)

「インタビュー (マリア・エレナ・ジ・モラインス)

“"Ensinando a juventude a pensar" O Brasil é a nação mais racista do Terceiro Mundo. Negar esse racismo é besteira” (folio 2)

「青少年に思索することを教えながら」「ブラジルは第三世界で最も人種差別の激しい国

家である。この人種差別の事実を否定することは愚かなことである。」

“Daqui a pouco teremos padres casados. Agora a sociedade não está preparada para isso.”  
(folio 3)

「これからまもなく妻帯神父が生まれるだろう。現在、社会はこのことに対する準備ができていない。」

Jornal: Diário Catarinense; Cidade: Santa Catarina

Data: 30/11/86 (domingo); (f. 129-134)

資料 30

“o negro e a educação Teólogo defende nova tomada de consciência” (Autor: Maroni João da Silva)

「黒人と教育 神学者、意識の新たな獲得を擁護」(マロニ・ジョアンオ・ダ・シルヴァ)

Jornal: Zero Hora ; Cidade: Porto Alegre

Data: 04/11/86 (Domingo, Página 24); (f. 64)

資料 31

“A Centelha do Natal”

「降誕祭の火花」

Jornal: Jornal de Santa Catarina; Cidade: Florianópolis ?

Data: 21 e 22/12/86 (domingo e segunda-feira); (f. 88)

資料 32

“O racismo ainda impede um melhor desempenho escolar”

「人種差別が未だによりよい学習を阻害している (教材に見出される黒人像)」

“Vera Regina (foto): o negra na escola sempre foi mostrado em condição de inferioridade”

「ヴェラ・ヘジナ教授 (写真): 学校において黒人は常に劣等な条件で表現されてきた」

Jornal: ?; Cidade: ?

Data: 1986 ?; (f. 66)

1987年 1点

資料 33

“Divisões no posicionamento da Igreja”

「(フリーメイソンに対する) 教会内の見解の相違 (ミラ神父擁護派)」

Jornal: O Estado; Cidade: Florianópolis

Data: 23/08/87: p. 10 Especial; (f. 115)

発行媒体年月日等不明 1点

資料 34

“Valongo, o retiro dos ex-escravos” (foto)

「ヴァロンゴ、元奴隷たちの隠遁地区 (写真)」<sup>21</sup>

Jornal: ? (SC)

Data: ? (f. 135)

---

<sup>1</sup> 科学研究費補助金基盤研究 (B) (一般) (H21~ H24) 課題番号: 21320069 「20 世紀における多様なマイノリティ状況の解明と共生言説の検討 (研究代表者・田所光男)」。

<sup>2</sup> 資料は、サンパウロにおいて最晩年のミラ神父から太極拳と茶道の指導を受けていた Carla Cristina Koga 氏が、神父の生前に保存するよう譲り受けたものである。

<sup>3</sup> 1986 年のインタビュー (資料 29) の最後の問い「あなたは文化的に白人であるのか？」に対して、明確に否定している「黒人であることは、異なった文化を持つということである。」

DC – Você é um branco, culturalmente?

**Padre Mira** – Não, porque isso transcende a minha função. Sou negro na minha expressão, até no meu canal de expressão. Seria uma traição não agir assim. Toda a cultura branca é relida pelo negro, e transformada. Ser negro é ter uma cultura distinta. Eu não me trai, não me prostituí. Essa história de igualdade não existe. Negro é negro, branco é branco. Essa igualdade é apenas teórica. Para mudar, só através da educação, que pra mim é o mesmo que revolução. Uma guerra que está aberta há muitos anos, há séculos.

<sup>4</sup> 北米では Afro(African)-American (アフリカ系アメリカ人) が人種の呼称として普及しているが、ブラジルではこのような用法はむしろ適切でないと考えられている。何人かのブラジル人の発言を筆者の理解したところから総合すると、次の二つの理由に集約される。先ず何よりもブラジル人であるということ。人種に言及すること自体は中立的なことである。ポルトガル語においても、afro-brasileiro/a という語は存在するが、例えばいくつかの辞書の書名において、Dicionário de arte sacra & técnicas afro-brasileiras (Raul Lody, 2003); Dicionário escolar afro-brasileiro (Nei Lopes, 2006), など、文化的伝統を明示することが一般的なようである。後者で Os afro-descendentes という例を見つけたが専門分野以外で使用される語彙ではないであろう。

<sup>5</sup> Cf. João Manoel Lima Mira, *A Evangelização do Negro no Período Colonial Brasileiro*, São Paulo, 1983, p.16-p.17. 本稿執筆中に、東京において茶道の指導を受けていた高木綾子氏から、日本での業績資料とともにお送りいただいた。本書の詳細な検討は、他日を期したい。

<sup>6</sup> (資料 20) の該当部分の原文: Há que se distinguir o cristianismo histórico, o que foi passado via conquistador (altamente alienado e alienante) e a proposta original de Jesus Cristo. Fui tomando consciência, a partir de uma reflexão latino-americana, que eu deveria diferenciar dentro de mim todas as três. A proposta original de Jesus é libertadora e, se conseguimos entender isto, então ela liberta e não nega a cultura que temos como etnia, ou seja, a proposta inicial foi completamente distorcida.

<sup>7</sup> 亡くなった翌日 (2010 年 1 月 12 日・ブラジル時間) に掲載された訃報が主な典拠である。 <http://professor-cebola.blogspot.com/2010/01/pe-mira-sj.html> (主要発表文献リストあり)

[http://www.ihu.unisinos.br/index.php?option=com\\_noticias&Itemid=18&task=detalhe&id=28859](http://www.ihu.unisinos.br/index.php?option=com_noticias&Itemid=18&task=detalhe&id=28859) なお、著書・論文等の部分的なリストは次の HP にも掲載されている。 <http://www.beingtao.org/pt/>

[PadreMira.html](#) (最終アクセス日: 2010年6月1日)

<sup>8</sup> ボフ以前にもヴァティカンとラテンアメリカの対立と聖職者の離脱の事例はすでに存在した。60年代にメキシコを中心に活動していたイヴァン・イリッチ (Ivan Illich 1926-2002) は、ラテンアメリカにおける教会の現状を批判し、激しい論争の末、1969年に聖職を離脱している。参照、『新カトリック大事典』I, p.524。

<sup>9</sup> 主に参照したブラジル史は次の3書である。シッコ・アレンカール; ルシア・アルピ; マルクス・ヴェニシオ・リベイロ (東・イシ・鈴木訳) 『世界の教科書シリーズ7 ブラジルの歴史・ブラジル高校歴史教科書』明石書店 2003; ボリス・ファウスト (鈴木茂訳) 『ブラジル史』明石書店 2008; 金七紀男 『ブラジル史』東洋書店 2009。

<sup>10</sup> 参照、乗浩子 『宗教と政治変動』有信堂 1998, p.118-p.143: 4章「解放の神学」。カトリシズムとマルクス主義思想の関係は長い歴史を持つが、筆者がコルドバ・カトリック大学で閲覧したムヒカ神父の手稿は、解放の神学に連なるカトリック司祭の先駆的理解として検討に値するであろう。

<sup>11</sup> 米国においてカトリシズムと反共主義との関係で想起されるのは、年代はかなり遡るが、いわゆる「赤狩り」「マッカシズム」のジョセフ・マッカシー (Joseph Raymond McCarthy 共和党上院議員 1947-1957) である。2009年に評伝が出版されたが、筆者は未見である。後の反共主義的中南米政策に系譜的に繋がるものがあるのか否か興味深いところである。

<sup>12</sup> 参照、金七、op.cit., p.192-p.193; 『現代ブラジル事典』新評論、2005、p.231。邦訳: 富岡成次 『未来の国ブラジル』河出書房新社、1993。

<sup>13</sup> 奴隷制廃止について前掲3歴史書では次を参照: アレンカール他、p.318-p.326「白人世界の中の黒人」; ファウスト、p.180-p.187「第二帝政の危機」。本文では「黄金法」という通称は使用されていない; 金七、p.123-p.127「奴隷制廃止に向かって」。本稿では、この記念事業が結局いかに行われたかについては確認できなかった。

<sup>14</sup> 北東部出身のブラジル人留学生によると、このような問題は現在解消されているはずであるが、確かに80年代には存在した。サンタ・カタリナ州とリオ・グランデ・ド・スル州といった南部では、ヨーロッパ系の移民が多いことから人種問題も顕著な形で現れたのでないかという説明であった。

<sup>15</sup> “O Pasquim” 軍政期の反体制的風刺新聞(1969-1991)、週刊タブロイド版。Cf. Wikipedia: Pasquim (2010年6月13日最終アクセス)。なお、pasquimという語自体に「風刺文、風刺の貼り紙(落書き); 三文新聞、低俗な新聞」(白水社、『現代ポルトガル語辞典』改訂版) という意味がある。語源はイタリア語: pasquinata < Pasquino (小学館、『伊和中辞典第2版』参照)。

<sup>16</sup> 少し長いが外国人研究者との関係を示す興味深い記事であるので全文掲載する。

(資料1 f. 99 ミラ神父加筆番号4)

O problema do Pasquim por causa dos problemas dos negros.

Por causa desta linda mulata, o PASQUIM quase sifu.

(黒人問題が原因によるパスキンの問題) ([顔写真下のサブタイトル] このきれいなムラータのおかげでパスキンは危うく取り潰しに)

Explico: quando já estávamos sob censura, entrevistamos a antropóloga americana Ângela Gillian. Ela nos contou que veio pro Brasil achando que aqui era um paraíso racial, depois de ver “Orfeu no Carnaval”, de Camus, não o Albert, mas o outro, o picareta. Chegou de navio a Santos e foi logo sendo tratada pela polícia como prostituta. Seu crime: era uma negra. Depressa Ângela descobriu que o racismo enrustido do Brasil doía mais que o declarado da sua terra.

Foi o que nos contou e publicamos com a aprovação do nosso censor na época, general Juarez, que concordou — diga-se a seu favor — integralmente com os termos da entrevista.

O general Bandeira, diretor da Censura Federal, ficou possesso. Uma estrangeira dizendo que havia racismo no Brasil! E além disso, uma negra! Ângela, acredito, só não foi em cana porque tivemos o cuidado de publicar a entrevista depois de sua partida.

Daí pra frente o PASQUIM passou a ser censurado em Brasília, da maneira mais bronca e violenta. Só não fechamos porque os leitores contumazes seguraram a nossa barra.

Agora os censores voltaram para seus esgotos e o PASQUIM tá de pé. E Ângela? Segundo sua amiga Joan Dassin (que no momento faz uma pesquisa sobre a censura no nosso jornal) está na Polinésia, possivelmente enchendo o saco dos racistas de lá — (Jaguar)

\* Angela Gillian 1936- 文化人類学者。現在、Faculty Emerita of The Evergreen State College, Evergreen, WA. 共編著：*Confronting the Margaret Meed Legacy: Scholarship, Empire, and the South Pacific*, 1992 などがある。2009年2月にオバマ大統領と教育長官に対する、アフリカ系文化の教育政策に関する10の提言をまとめた公開書簡の共同執筆者に名を連ねている。

(<http://www.nathanielturner.com/educatorsofafricanancestrytoobama.htm> 最終アクセス2010年7月27日)

\* Joan R. Dassin 1979年当時、Visiting Scholar at the Institute of Latin American and Iberian Studies at Columbia University. ブラジル軍政下の人権問題や検閲に関する論文として *A Report on Human Rights in Brasil: A Report as of March, 1979* (Universal Human Rights, vol. 1, No. 3 Jul-Sep 1979) 等。

<sup>17</sup> (資料25) — No dia seguinte, Eriel procurou um advogado para orientá-lo no caso. Recebeu como resposta do primeiro advogado que procurou que “só ia gastar dinheiro”. Vários outros advogados recusaram-se a assumir o caso. Ele, então procurou o comandante do 5º Distrito Naval, pois recebeu informações de que ele há havia fechado vários clubes por atitudes semelhantes de seus presidentes. “O comandante alegou que nada poderia fazer, pois só agia quando os atos de preconceito vitimavam soldados de sua corporação”, afirmou Eriel.

O comandante aconselhou-o a procurar o Sindicato dos Carteiros e lá, Eriel recebeu como resposta a alegação do advogado do sindicato: “Só tratamos de questões trabalhistas”. — O juiz alegou na sentença que não tinha competência para decidir sobre o caso. —

<sup>18</sup> ガイゼルの政権の評価に関して、ファウスト (p.418ff.) と金七 (p.222-p.225) からは比較的肯定的な印象をうけるのに対し、アレンカール他 (p.613-p.617) は、訳者があとがきで指摘するように、マルクス主義歴史学の影響もあるのか、評価により距離感を覚える。

<sup>19</sup> A Lei Afonso Arinos (人種差別禁止法) 1951年、上院議員 Afonso Arinos de Melo Franco (1905-1990) の提案により制定される。条文については次を参照。

<http://www.planalto.gov.br/ccivil/Leis/L7437.htm> 1988年憲法に基づく現在の法令については <http://www.soleis.adv.br/racismo.htm> (いずれも2010年6月16日最終アクセス)。

<sup>20</sup> Cf. Nei Lopes, *Dicionário Escolar Afro-brasileiro*, São Paulo, 2006, p.102.

<sup>21</sup> “Valongo” Porto Belo (SC) から約20キロ。Cf. O Sertão de Valongo (<http://www.portobelo.com.br/informacoes-turisticas/pontos-turisticos/2010年6月13日最終アクセス>)。